「異文化背景を持つ子ども」

――変貌し続ける子どもの実態――

佐野市立佐野小学校　原　田　真理子

佐野市は、県の取り組みに先立ち平成元年度から独自に外国人児童生徒を受け入れ学校生活に適応させるための日本語教室を開設し、現在に至っている。私はその開設当初から、日本語教室指導

員として外国の子ども、とりわけ南米からやってくる日系人家族の子どもたちとの関わりを持ってきた。近年では、南米のみならず、中国・フィリピンからの子どもが増加傾向にある。また、国籍の違う両親との間に生まれ、日本で育った子どももいる。まさに「異文化背景を持つ子どもたち」がここ数年の間、教育現場に増えていったことになる。ひと昔前までは、こんな光景はインターナショナルスクールでしか見られなかったと思う。しかし、現在では一般公立小中学校でもごく当たり前のように見られるようになり、日本の教育現場が変化してきていることを改めて認識する。その変貌ぶりには目をみはるものがある。自分がこの仕事に携わってかれこれ20年近くなるが、子どもの実態は日々変化している。

古き良き時代の子どもたち

日本語教室開設当初に出会った子供たちは、かつて日本から海外へ移住した家族の二世三世たちで、来日した目的が就労であったにしろ、子どもの教育に関しては非常に熱心で、古風な考えをもつ親が多かった。「郷に入っては郷に従え」の言葉どおり、日本の学校生活に適応していくためには自ら努力をして日本の文化・習慣を享受することがいちばんの近道と考えた。子どもが日本の学校生活にうまく溶け込めないと不平不満を訴えたとしても、多くの親たちは「自分たちも職場で似たような経験をしている。けれども日本で生活していくためには、これくらいの困難を乗り越えられないでどうする。お互いに頑張ろう。そうすれば、だんだん日本での生活が楽しくなるし、居場所も見つかる。」というような言葉がけを怠らなかった。そのかいあってか、子どもたちは比較的短期間のうちに学校生活に適応し、中には素晴らしい成績で国立大学に合格した者もいる。

日本語教室は、年2回、地域の自然や文化を学ぶ目的で校外学習を実施しているが、そんな時はこちらが言わずとも上級生が下級生のめんどうを見、たとえ喧嘩になったとして必ず誰かが仲裁に入る。お弁当を広げる時間になると、自分が持ってきたお弁当のおかずやお菓子をみんなで分け合い、私にも食べてくださいと持ってくる。一人や二人ではない。異国の仲間同士が肩を寄せ合って生きている空気を感じることができた。彼らは、自分の幼少時代を思い起こさせるような、古き良き時代の雰囲気を持った子どもたちだった。

多様化する家族構成

すでにご承知のように、入管法改正以来外国人の数は増え続け、とどまるところを知らない。当時は彼らが日本に永住する人々となることは予測がつかなかったであろう。たとえ彼らの子どもたちが日本の学校へ就学したとしても、数年の内に帰国してしまうのでは、これといった対策を講じることもさほど必要ないとされたであろう。しかし、現実は増え続ける外国人児童生徒への対応に苦慮している学校が後を絶たないという状況である。加えて、子どもの実態も年々多様化している。どういうことかというと、来日した青年たちが定住し続け結婚適齢期を迎え、日本で生涯の伴侶と出会い家庭を持つ。この出会いは、日本人であったり、自分とは違う国の人であったりする。生まれた子どもは、小さいときからいろいろな言語のシャワーを浴びて育つ。時には、家庭の事情で日本と親の国を行き来する、文化間移動が見られる。こういった言語環境で育った子どもたちが就学年齢に達し、一般の小学校に入学してくる。就学後何が起こるのか、想像に難くないであろう。

就学時健康診断の際、会場に現れた親子の中に、数人外国籍の親を持つ子どもがいて困惑することも、珍しくなくなった。就学予定者名簿に日本人として漢字で記載されていると、当日までこちらが把握するすべはないのだ。国籍に限らない「異文化背景を持つ子どもたち」は確実に増えているのである。新たに外国から来た子どもを受け入れる際も、このごろは日本語教育に理解を示してくれない親が比較的多く、適応指導は困難を極める。

子どもたちの「明日」を見据えて

子どもの言語環境が、成長過程において与える

影響の大きさは計り知れないと思う。精神的発達とも密接な関係があると思う。家庭内で2つ以上の言語が飛び交う環境の中で、子どもの母語はどうやって育っていくのか。

母語そのものが確立しないまま、就学年齢に達すると、その後の思考力に影響すると言われている。働くことに忙しい親は、子どもとの接触が希薄で、日本の学校に通ううちに母語を喪失し思考回路が日本語に切り替わっていくわが子の実態を知らずに時間が過ぎていく。親子間のコミュニケーションが取れにくくなってから気付くのでは遅すぎる。子どもを取り巻く環境を考えると、多文化共生教育への課題は山積している。

日本語教育に携わる者として、この子どもたちの5年後、10年後を見据えて常に子どもたちのニーズに合った教育の方法を模索していかなければならないと痛感している。